

事例Ⅰ 分解ショートケース演習⑤

A社は、1970年代に現社長が創業し、首都圏で18店の美容院を経営している。資本金は3,000万円、売上高は6億2千万円である。従業員数は97名で、その多くが美容師、または美容師の見習いである。

A社では、専門学校を卒業した学生を美容師見習いとして新卒採用している。新卒の美容師見習いは、将来は自分の店を持ちたいという夢を持っている者が多く、そのためにも技術を身につけたいという大きな期待を抱いて入社してくる。しかし、実際には定着率が悪く、3分の1が1年以内に辞めてしまう。美容師見習いの離職率は店舗間によって大きな差があり、繁盛店ほど離職率が高い傾向にある。技術取得の度合いによって異なるが、見習い期間は3年間を想定している。見習いを卒業する期間も店によって差が生じており、繁盛店ほど見習い期間が長くなる傾向にある。見習いは先輩美容師を補助しながらヘアカット、パーマ、カラーリングなどの技術を学んでいる。業務時間の終了後に先輩の美容師から指導を受けているが、繁盛店では時間を十分に取れない場合も多い。「現場で基礎的な内容全てを教えることは困難である。」という声もあがっている。

問題

A社では美容師見習いの離職率が高く、特に繁盛店でその傾向が強い。離職率が高い理由を与件より推察して、解決策とともに150字以内で述べよ。